発心集の「けり」のテクスト機能

――係り結びの使い分け――

藤井俊博

はじめに

阪倉篤義（一九五六）が指摘したように、助動詞「けり」は、物語の始発部や終局部に用いられ物語の文章を枠づけるテクスト機能をもっている。筆者は、拙稿（二〇一一）（二〇一二）（二〇一三）で、この点に注目し、今昔物語集、宇治拾遺物語、古本説話集などの説話集の文章を通して「けり」のテクスト機能を検討してきた。これにより「けり」の枠づけ機能はこれらの説話集に広く認められるが、具体的には終止形の「けり」とともに、「にけり」や係り結びによる「ける」など、「けり」のバリエーションとなる用法を運用し、文章に区切りをつける表現を作っていることが明らかになってきた。具体的には、終止形の「けり」は冒頭第一文に用い始発機能を発揮するのに対して、「にけり」は段落の末尾や事件の終局部に多く用いられる場合が多いこと、また、係り結びによる「ける」が冒頭部や終局部に多く用いられ、枠づけに関与していることなどがこれらの説話集に見られる顕著な傾向と言えるものである。

本稿では、これらの成果を受け、鎌倉時代の仏教説話集である発心集を取り上げ検討する。発心集は、事件の本体と話末評語の組み合わせによる文章構造を持つ点に特徴があり、全102話のうちの92話に長短様々な話末評語が付されている。このような文章構造では、説話本体と話末評語の区切りをつける表現が必要とされ、説話の纏まりを作る「けり」の用法が重要となる。特に終結機能の形式は、筆者がこれまで扱った今昔物語集・宇治拾遺物語・古本説話集では「にけり」が主たる表現形式であるのに対して、発心集では、係り結びの「ぞ～ける」「なむ～ける」の表現が多く用いられるため、係り結びのテクスト機能を見る好適の作品であると言える。そこで

本稿では、係り結びの使い分けの面を中心に用法を検討したい。

方法としては、これまでの筆者の論考と同様に、文末の「けり」の話中での使用位置に着目し、とりわけ文章の区切りをつける段落末尾や終局部において「なむ～ける」「ぞ～ける」「にけり」などがどのように用いられているかを検討する。なお、発心集の成立過程については不明な点が多く、古写本の数も多くない。資料としては、寛文十年（一六七〇）刊の平仮名交じり整版本八巻①を用いるが、鴨長明の原テキスト（一二一六年）そのものではなく、後世に改変した部分も多く含むと思われる。本稿では、本資料を鎌倉時代に成立した文語による物語の流布本として位置づけた上で、今昔物語集などの平安期の作品に見出された用法が、鎌倉時代以降の作品にどのように用いられているかという観点から考察したい。

一　「けり」の分布

まず、発心集の「けり」（本節では、終止形だけでなく全ての活用形を含む）が話中のどの位置に用いられているかという面から話型の傾向を見ておく。「けり」の分布の記述はこれまで筆者が用いた次の基準による。すなわち、一話を説話本体と評語部に大きく分け、さらに説話本体を冒頭部と展開部・終局部に分ける。具体的な事件の叙述部分が展開部でありその最終部分が終局部である。冒頭部は、主人公の出自・性質・事件に至るまでの行跡などを記した部分である。評語部は、展開部終了後の後日談、批評、教訓、解説、伝承の内容とする。発心集では、評語部が長い話が多くあり、中には主題に関連した挿話的な説話を紹介する場合もあるが、挿話的名説話は評語として扱うため用例に含めない。また、冒頭部は展開部と明確な区分がない話もある。右のような冒頭部の内容であっても、文が切れずに展開部に続く場合は展開部の例として扱う。

発心集の全話を対象に、文末の「けり」が展開部に用いられるかいなかによって大きく(一)～(三)にわけ、右に示した使用位置によって話型を細分すると次のようになる。

(一)　展開部に「けり」を用いないもの　　総計　29話

A　冒頭部と評語部に用いるもの　　0話
B　冒頭部と終局部に用いるもの　　19話
C　冒頭部と終局部と評語部に用いるもの　　3話
D　冒頭部にのみ用いるもの　　2話
E　終局部にのみ用いるもの　　3話
F　評語部にのみ用いるもの　　1話
G　終局部と評語部に用いるもの　　1話

(二)　展開部に「けり」を用いるもの　　総計　70話

H　冒頭部と展開部と評語部に用いるもの　　2話

I	冒頭部と展開部と終局部に用いるもの	43話
J	冒頭部と展開部と終局部と評語部に用いるもの	18話
K	冒頭部と展開部に用いるもの	2話
L	展開部と終局部に用いるもの	2話
M	展開部と評語部に用いるもの	0話
N	展開部と終局部と評語部に用いるもの	3話
O	展開部にのみ用いるもの	0話
	総計	3話

（三）一話のうちに「けり」を用いないもの

展開部に「けり」を用いない（一）のタイプは約三割であるが、その中でも冒頭部と終局部に「けり」を用いる典型的な枠構造を作るBに集中しているのは、今昔物語集や宇治拾遺物語などと異なる傾向である。[2] 次に典型例としてBの例を挙げておく。

（冒頭部）近き比、近江の池田と云ふ所に、賤き男ありけり。おのが身は年たけて若き子をなむもちたりける。

（展開部）二人相具してなすべき事ありて、奥山に入りたりけるに、谷深く道嶮しくていと苦しかりければ、本の陰にやや久しく休み居たり。比は十月の末にやありけん、木枯すさまじく吹きて、木々の本の葉、雨の如く乱れたり。

父、これを見て云ふやう、「汝、此の本の葉の散るを見るや。是を静かに思ひつづくれば、我が身のありさまにいささかもかはらぬなり。其の故は、春はみるみると若葉さしそめたりと見し程に、やうやうしげりて、夏は皆盛に成りにき。八月ばかりより青き色、黄に改めて、後には紅深くこがれつつ今は少し風吹けばもろく散る。落ちてはつひに朽ちなんとす。我が身も又是におなじ。十歳ばかりの時、譬へば春の若葉なり。二三十にて盛なりし時は、夏の木ずゑ、かけしけりて心地よげなりし比に似たり。今六十にあまり、黒髪やや白く、皺たたみ、はだへ変り行く。即ち、秋の色づくに異ならず。未だ嵐に散らずと云ふばかり也。それ、又今日明日の事なるべし。かくあだなる身を知らず、世を過ぐさんとて、朝夕と云ふばかり苦しき目を見て、走りいとなむ事こそ、思へばよしなけれ。我は、今は家へも帰るまじ。法師になりてここに居て、此の木の葉の有様など思ひつづけつつ、のどかに念仏してをらんと思ふ。わ主は、年も未だわかし。末はるかなれば、とく帰りね」と云ふ。

此の男の云ふやう、「誠にたがはず、云はれたる所はのたまふやうなれど、庵一つもなし。田畠つくるべき便もなし。すべて雨風の苦しみ、けだ物の怖れ、一つとしてたへ忍ぶべき所にもあらず、いかにしてか、独は住み給はん。さらば、我も具し奉りて本の実をも拾ひ、水をも汲みて、いかにもなり給はむ様にこそはならめ、今齢盛なりと云へども、たとへば、夏の木の葉にこそ侍るなれ。つひに紅葉して散らん事、疑ひなし。いかに況や、木の葉は色づきてこそ

散るなれ。人は若くて死ぬるためし多かり。やや木の葉よりもあだなりと云ひつべし。さらに古郷へ帰るべからず」と云ひければ、哀に思ひたり。「さらば、いとうれしき事」とて、人もかよはぬ深山の中に、ちひさき庵二つ結びて、それにひとりつつ朝夕念仏してぞ過ぐしける。

（評語部）むげに近き世の事なれば、皆人知りて侍りとなん。或人の云はく、「父已に往生しをはりぬ。息今に現存」と云々。

（巻三ノ八）

冒頭段落で「ありけり」「なむもちたりける」、終局部で「ぞ過ぐしける」を枠に用いている。後述する冒頭部の「ありけり」「なむ～ける」、終局部の「ぞ～ける」で枠づけた典型例である。この始めと終わりの枠の内側には、文中に「ける」「けれ」をとる文があるが、いずれも文末は「たり」をとっている。さらにその内側には終止形の「云ふ」があるという構造である。文中用法よりも終止形や係り結び・連体形終止法などの文末用法が文章の枠づけにとっては重要である。単に「けり」を用いるというだけではなく、係り結びなどの強く切る文末表現が枠づけに関与するのである。

一方、展開部に文末の「けり」を用いる(二)の構造の話が多くを占めるが、この場合でも、展開部では段落末にのみ「けり」が用いられており、実質的に(一)の構造に近い例が多い。筆者の調査で(二)Ⅰ・Ⅰとした中で、右の例のように展開部の「けり」が段落末尾のみにあり、実質的に(一)のような枠構造の例に近い話は、Ⅰの総数43話中27話、Ⅰの総数18話中6話が見られた。次に、例の多いⅠから典型例を挙げておく。

（冒頭部）薬師寺に証空律師と云ふ僧ありけり。

（展開部）齢たけて後、司なんど辞して久しく成りにけるを、彼の寺の別当重く煩ひける時、律師弟子共に言ひける様、「今度一別当の闕に望み申さんと思ふはいかがあるべき」と、弟子どもにかたるに、同じさまに、「あるまじき事也。御年たけ給ひたり。つかさを辞し給へるに付けても、必ず覚す所あらんかしと、人も心にくく思ひ申したるを、今更さやうに望み申し給はば、思はずなる事にて、人も心おとりつかまつるべし」と、理を尽くしていみじういさめけれど、更に「げにも」と思へる気色なし。いかにもその心ざし深き事と見えければ、すべて力及ばず。弟子、寄り合ひて此の事を歎きつつ云ふ様、「此の上には、いかに聞こゆとも聞き入らるまじ。いざ、空夢を見て、身もだえ給ふばかり語り申さん」とぞ定めける。

日比へて後、静なる時、一人の弟子云ふやう「過ぎぬる夜、いと心得ぬ夢なん見え侍りつる。此の庭に、色々なる鬼のおそろしげなるあまた出来て、大きなる釜をぬり侍りつるを、あやしく覚えて問ひつれば、鬼の云はく、『此の坊主の律師の料也』と答ふるとなん

見えつる。何事にかは、深き罪もおはしまさむ。此の事心得ず侍る也」と語る。即ち驚き恐れんと思ふほどに、耳もとまでゑみまげて、「此の所望の叶ふべきにこそ。披露なせられそ」とて、拝みければ、すべて云ふはかりなくてやみにけり。

（評語部）智者なればこそ此の律師までものぼりけめ。年七十にて此の夢を悦びけん、いと心うき貪欲の深さなりかし。かの無智の翁が独覚のさとりを得たりけんには、たとへもなくこそ。（巻三ノ九）

この例では、段落の途中には「気色なし」「及ばず」「語る」などの形容詞や動詞の終止形が用いられ、また、文中には「ける」「けれ」が用いられるが、文末においては「けり」「ぞ～ける」「にけり」が用いられることで文章の切れ目が示されているのである。

右のような典型例が多く見られることから、発心集は、「けり」による枠づけが多く用いられる作品であると評することができる。

二　冒頭部の様相

まず、冒頭部の様相を、冒頭第一文と冒頭段落末尾文の傾向を中心に述べる。適宜、宇治拾遺物語・古本説話集と比較する。なお表にあげる項目は、種類が多い場合、「けり」を含む表現と、その他の使用率上位の表現のみをあげることにする。

冒頭第一文では、発心集では、第一節で典型例に挙げたような人物の存在提示文の「ありけり」62例だけで6割をしめており、冒頭文の類型になっている。その他「動詞けり」が10例あり、合わせて72話（70・5％）が見られる。これは、古本説話集28話で総話数70話の40％、宇治拾遺物語116話で総話数197話の59％に比べても、例が多い。その他、冒頭第一文では「あり」「名詞なり」「動詞終止形」を始め終止形の文末が一般的で、係り結びの「なむ～ける」「ぞ～ける」は例外的である。典型例に「ありけり」を用いた例を挙げたので、次に「動詞けり」の例を挙げておく。

（表１）　冒頭第一文

ありけり	62
動詞けり	10
あり	9
名詞なり	7
動詞終止形	5
にけり	2
き	2
たりけり	1
なむ～ける	1
ぞ～ける	1
ぬ	1
形動終止形	1
合　計	102

（例１）　或る聖、船に乗りて近江の水うみを過ける程に、網船に大きなる鯉をとりて、もて行きけるが、いまだ生きてふためきけるを哀れみて、著たりける小袖をぬぎて、買ひとりて放ちけり。（巻八ノ一三）

冒頭段落末尾とは、冒頭段落が二文以上にわたり、展開部と境目を作る場合である。今昔物語集のなどでは冒頭段落を区切る意識が

強いが、発心集では展開部と融合する場合も多いためか、筆者の観察では46話にとどまった。その中で、「けり（終止形）」が10例で最も多く見られるが、その他、典型例に示した「なむ～ける」の9例の他、「なむ～たりける」3例など「なむ」の係り結びが多く見られる。これに対して、「ぞ」は、「ぞ～ける」4例に止まり、終局部に多い「にけり」も3例に止まる。

後述のように、展開部の段落末尾や終局部においては少ない「なむ～ける」が冒頭部の段落末尾には比較的多いことは、「ぞ～ける」に比べて文章を断止する力が相対的に弱く、文章の途中で軽く纏まりをつける機能を担っていると考えられる。次の例は、「ぞ～ける」を冒頭段落末尾に用いた例であるが、その前には「なむ～ける」が用いられており、相対的に小さい切れ目で使用している点が窺える。

（例2）　永観律師と云ふ人ありけり。年比念仏の心ざし深く、名利を思はず世を捨てたるが如くなりけれど、さすがに君にもつかまつり、知れる人をわすれざりければ、殊更ふかき山を求むる事もなかりけり。東山禅林寺と云ふ処に籠居しつつ、人に物を貸してなむ日を送るはかり事にしける。借る時も返す時も、唯来る人の心にまかせて沙汰しければ、中々仏の物をとていささかも不法の事はせざりけり。いたくまづしきものの返さぬをば、前によびよせて物の程に従ひて、念仏を申させてぞあがはせける。

東大寺別当のあきたりけるに、白河院此の人を成し給ふ。……　（巻二ノ二）

（表２）　冒頭段落末尾

動詞けり	10
なむ～ける	9
ぞ～ける	4
ず	4
なむ～たりける	3
名詞なり	3
にけり	3
その他	10
合　計	46

三　展開部の様相

次に、展開部の「けり」使用の実態について、段落冒頭、途中、段落末尾、終局部の順に特徴を述べていく。

展開部の段落冒頭は、前節で見た冒頭段落に続く展開部の冒頭段落の場合と、展開部途中に切れ目があり、それに続く新たな段落の冒頭の場合がある。これに該当するのは総計214例である。動詞終止形58例が多く、「ぬ」20例「ず」16例「動詞けり」16例「あり」13例「ありけり」12例などが終止形による表現が多い。一方、係り結びは、「ぞ～ける」4例「ぞ～たりける」3例、「なむ～ける」5例など少数である。次に「なむ～ける」の例を挙げておく。

（表３）　展開部段落冒頭

動詞終止形	58
ぬ	20
ず	16
動詞けり	16
あり	13
ありけり	12
なし	9
つ	7
にけり	7
り	7
たりけり	6
なむ～ける	5
ぞ～ける	4
ぞ～たりける	3
たりける	1
その他	30
合　計	214

（例３）　中務の宮の文習ひける時も、少し教へ奉りては、ひまひまに目をひさぎつつ、常に仏をぞ念じ奉りける。

有る時、彼の宮より馬をたまはらせたりければ、乗りて参りける道のあひだ、堂塔の類ひはいはず、いささか卒都婆一本ある処には、必ず馬より下りて恭敬礼拝し、又、草の見ゆる処ごとに、馬の食みとまるに心に任せつつ、こなたかなたへ行く程に、日たけて、朝に家を出る人、未申の時までになむ成りにける。……　（巻二ノ三）

右の例は、段落末尾で「ぞ～ける」を用い、次段落の冒頭文を「なむ～ける」で始めた場合である。

展開部の途中は総計597例であるが、典型例に示した動詞終止形が188例と多く見られ、「けり」の枠で囲まれた展開部分には動詞終止形が基本的な表現として用いられる。以下、「なし」「ぬ」「動詞けり」「にけり」「り」など終止形の用法が上位を占めている。

（表４）　展開部途中

動詞	188
なし	46
ぬ	44
動詞けり	31
にけり	29
り	22
なむ～ける	18
名詞なり	15
ぞ～ける	14
つ	13
たりけり	10
たり	10
その他	157
合　計	597

係り結びでは「なむ～ける」18例「ぞ～ける」14例で、やや「なむ」が多いが、次のように終局部に近い位置で用いている。

（例４）　「そのていの事にあらず」とて、事のいはれをよくよく云ひきかせければ、「しからば畏まり侍り」とて、此田を、二人もちたりける子に分けとらせてなん、食物をば沙汰せさせける。

かくて猿沢の池のかたはらに一肌なる庵結びて、いとど他念なく念仏して居たりければ、本意の如く臨終正念にして、西に向ひて、掌を今わせて終りにけり。　（巻三ノ一）

（例５）　妻子ありけれど、か程に思ひ立ちたる事なれば、留むるにかひなし。空しく行きかくれぬる方を見やりてなん、なき悲しみける。是を、時の人、「心ざしの至りあさからず、必ずまゐりぬらん」とぞおしはかりける。　（巻三ノ四）

右の例では、「なむ～ける」が終局部の「にけり」や「ぞ～ける」

に近接する位置で用いている。同様の例が、巻四ノ一二・巻八ノ八にあり、「なむ～ける」→「ぞ～ける」「にけり」の順序が窺える。

展開部の段落末尾の総計156例中、係り結びは「ぞ～ける」16例「なむ～ける」8例などを併せると総数24例で最も多い。次いで動詞終止形23例、「にけり」18例が続く。「にけり」の系統では、その他に「なむ～にける」2例「ぞ～にける」1例「にける」1例「にけりとぞ」1例など、係り結び・連体形終止文が見られる。また、完了の「ぬ」がいわゆる場面閉じと言われる用法で見られ、完了の助動詞「り」「つ」などにもそれに準じる用例がある。「なし」「ず」など打ち消し系統の表現にも、場面の切れ目の例が見られる。

このように段落末尾の表現は多様であるが、「なむ～ける」「ぞ～にける」の例を、Ⅰの話から補っておく。

（例6）　主もいささか道心ある者にて、「事がらを心えず覚ゆれば申すばかりぞ。云はるる処も又理也。さらば静に居給へ」と

（表5）　展開部段落末尾

動詞終止形	23
にけり	18
ぞ～ける	16
ぬ	14
なし	14
なむ～ける	8
ず	7
たり	4
り	4
つ	4
ぞ～たりける	3
その他	41
合　計	156

て、事の心を問ひ、我が心ざしある様など云ひける程に、やがて此の僧得意に成りて、山の中の大離れたる所をきりはらひて、形の如くいほを結び住みそめたるになむありける。

（段落末尾）

かくて貴くおこなひて年比に成りければ、近き程にて、福原入道此の聖の事を聞き給ひて「実に貴き人哉。事ざま見よ」とて、盛俊を使ひにて消息し給ひたりけり。……

（巻二ノ六）

（例7）　かくて、帰りなんとする時云ふやう「三月十八日に竹生嶋と云ふ処にて、仙人集まりて楽をする事侍るに、琵琶を引くべき事の侍るが、え尋ね出し侍らぬなり。貸し給ひなんや」と云ふ。「安き事也。いづくへか奉るべき」と云へば、「ここにて給はらん」と云ひて、ともに去りぬ。琵琶を送りたりけれど、その時は人もなし。ただ木の本に置きてぞ帰りにける。

（段落末尾）

さて、此の法師は三月十七日に竹生嶋へ詣でたりけるに、十八日暁の寝覚に、遥にえもいはれぬ楽の声きこゆ。雲にひびき風に随ひて、よのつねの楽にも似ず覚えて目出たかりければ、涙こぼしつつ聞き居たる程に、やうやうちかくなりて、楽の声ととまりぬ。……

（巻三ノ一一）

（表６）　終局部

ぞ〜ける	26
にけり	25
なむ〜ける	9
けり	6
けるとぞ	4
たりけり	3
なむ〜たりける	3
ぞ〜たりける	2
その他	24
合　計	102

終局部では、係り結びが多く、「ぞ」の例が、典型例にあげた「ぞ〜ける」の26例と、「ぞ〜たりける」2例「ぞ〜にける」1例を合わせた29例が最も多い。「なむ」の例は、「なむ〜ける」9例「なむ〜たりける」3例「なむ〜にける」1例などの13例がある。このように終局部では段落末尾の場合と同様に「なむ」より「ぞ」が優勢である。「にけり」も25例と多く、これらの「ぞ〜ける」「なむ〜ける」「にけり」の総計67例は全話の六割以上をしめている。

このように、終局部では係り結びの例が多いことが注目される。宇治拾遺物語では終局部の係り結びの例（「ぞ」19例「なむ」8例、総計27例）は「にけり」43例の0・62倍であるが、発心集の総計42例は、「にけり」の総数25例の1・68倍にも上る。

その他、「にけりとぞ」4例、「けるとぞ」4例、「となむ」2例、「けるとかや」1例、「けるとなむ」1例、「けりとなむ」1例など「と」を含む形式が多いのも特徴である。これらの「と」が続く場合の「ける」はすべて係助詞がない連体終止の用法であり、あたかも「と」のあとの「なむ」「ぞ」がその表現性を補完しているかのようである。このような点からも、「と」を含む表現や「ぞ」「なむ」などが終局部の目印になっていることが窺える。[3]

四　終局部における「ぞ」「なむ」の選択

以上の結果をもとに、文末表現を話の位置によって分類し、使用頻度順に掲出すると、次のようでなる。

冒頭部　（第一文）けり（ありけり）
　（段落末）なむ〜ける・ぞ〜ける・にけり

展開部　（冒頭）動詞終止形・ぬ・けり・なむ〜ける・ぞ〜ける
　（途中）動詞終止形・なむ〜ける・ぞ〜ける
　（段落末尾）動詞終止形・にけり・ぞ〜ける・ぬ・なむ〜ける
　（終局部）ぞ〜ける・にけり・なむ〜ける

「けり」による文末表現に絞ると、冒頭部では、

「けり」（第一文）→「なむ〜ける」（冒頭段落末尾）

展開部では、

「けり」（冒頭の書き出し）→「なむ〜ける」（段落の途中）
→「ぞ〜ける」「にけり」（段落の末尾・終結部）

という傾向が窺える。このように、終止形の「けり」は説話の冒頭部や展開部の冒頭に用いられやすく、係り結びの「なむ～ける」は説話の冒頭部や、展開部の途中の叙述に多く用いられ、「ぞ～ける」は、展開部の段落末尾や終局部に偏る傾向がある。叙述内容との対応から言うと、「なむ～ける」は展開部を説明的に進める叙述に使用されやすいのに対して、「ぞ～ける」は事件の終結部分に用いられやすいと捉えられるであろう。

発心集でも、今昔物語集・宇治拾遺物語・古本説話集などと同様に、「にけり」が冒頭部や展開部の段落末や終局部に用いられやすい傾向を窺うことができた。さらに発心集に特徴的に見られたのは、「にけり」以上に、係り結びの「ぞ～ける」が終結機能を担う表現として用いられ、係り結びの「なむ～ける」よりもより強いテクスト機能を担っているという傾向である。

そこで次に、発心集の「ぞ」「なむ」の使用傾向について、宇治拾遺物語・古本説話集と比較してみる。

総話数は宇治拾遺物語197話、古本説話集70話、発心集102話であるが、「ぞ」「なむ」による係り結びの総数を見ると、宇治拾遺物語164例（「ぞ」124例「なむ」40例）、古本説話集47例（「ぞ」33例「なむ」14例）、発心集170例（「ぞ」90例、「なむ」80例）で、宇治拾遺物語と古本説話集では1話に1例以下であるのに対し、発心集では係り結びが一話につき1・7例で、飛び抜けて使用が多い事が窺える。ただ、発心集の例数は、話末評語に多く含まれる挿話的内容の例数をも含む数であるので、次に評語部の例数を除いた「ぞ」「なむ」の使用数を比較してみる。

宇治拾遺物語では説話本体の「ぞ」「なむ」の総数は123例で、各語の使用比率は「ぞ」89例（72・4％）「なむ」34例（27・6％）で、「ぞ」が三倍近く用いられている。古本説話集でも、総数31例で「ぞ」22例（71・0％）「なむ」9例（29・0％）が見られ、宇治拾遺物語とほぼ同じ比率の差である。これに対し、発心集では、総数144例で「ぞ」78例（54・2％）「なむ」66例（45・8％）と、「ぞ」と「なむ」の比率の差が小さいことが窺える。

さらに終局部に用いられた例を見ると、宇治拾遺物語では、全197話中「ぞ」19例（話数の9・6％）、「なむ」8例（同4・0％）が用いられる。古本説話集でも、終局部では「ぞ」5例（同7・1％）、「なむ」2例（同2・8％）で、各語が終局部に用いられる比率は少ない。これに対し、発心集では、終局部の用例は「ぞ」29例（同28・4％）、「なむ」13例（同12・8％）で、比率の少ない「なむ」でも宇治拾遺物語の「ぞ」よりは多く、「ぞ」にいたっては三分の一近くの説話に用いられていることが注目されよう。

このように、宇治拾遺物語・古本説話集では、「なむ」より「ぞ」

を多用しているが、終局部には「なむ」「ぞ」ともに例が少ない。一方、発心集では係り結びの使用量が多く「なむ」と「ぞ」の使用数に大差がないが、終局部には「ぞ」を中心に多く用いている。

三作品のいずれでも「ぞ」が終局部で多く用いられるのは、文章構成の面から見ると興味深い。鎌倉時代の口語では、すでに係り結びが衰退しつつあったと考えられており、口語的とされる「なむ」は平安後期の物語の地の文ではすでに使用が後退している。宇治拾遺物語・古本説話集では、全体に「ぞ」の比率がかなり高いのは、そのような新しい傾向の反映であると考えられる。「なむ」の係り結びは、鎌倉時代の口頭語としてはほとんど消失していたと考えられている（北原保雄（一九八二）大野晋（一九九三））が、「ぞ」の係り結びは「なむ」よりは長く命脈を保ち、鎌倉期以降も延慶本平家物語などでは地の文に「ぞ～ける」が多く用いられている。このように「ぞ～ける」が物語叙述の中心であった時代に、終局部に「ぞ」を用い、それ以前の叙述に「なむ」を使用するという使い分けがあったとすれば、それは文語的文体の中で、文章構成上の意図をもって使用したものと考えられる。

では、発心集では「ぞ」「なむ」の意味をどのように捉え、文章構成に利用しているのであろうか。「ぞ」と「なむ」の用法の違いについて、大野晋（一九九三）は、平安時代の「なむ」は「礼儀のわきまえ」の気分を伴って聞き手に伝える語で、「なむ～ける」はそのような気分を伴う語りの形式であるのに対し、「ぞ」は「新情報・教示・断定として報知し強調する」語であるとした。[④] 発心集がこのような平安時代の用法を受け継いでいるとすると、「なむ～ける」はへりくだった姿勢で語り出しす部分に用い、段落の末尾やクライマックス部分では「ぞ～ける」を使って強調的に話を終了していると言える。

テクスト機能の面から見ると、発心集では、軽く文章を切る部分には「なむ～ける」が、大きく文章を切る部分には「ぞ～ける」が用いられやすい。[⑤] 発心集の文章構成では、冒頭文を「ありけり」で始め、冒頭段落末尾や展開部冒頭・展開部途中を「なむ～ける」の平静な語りで展開し、展開部段落末尾や終局部で「ぞ～ける」によって強調的にまとめて終了する話型があると言えよう。

おわりに

以上見てきたように、発心集の文章構成では、「けり」を含む係り結びが大きな役割を担っている。「なむ」と「ぞ」はテキスト機能を異にし、「なむ～ける」は冒頭段落末尾や段落途中で軽い切れ目を作るに過ぎないが、「ぞ～ける」には終局部で大きく文章をまとめる用法が見られた。発心集の話型をモデル化すると、典型例に

も示したように、冒頭の「けり」と終局部の「ぞ～ける」「にけり」によって大きな枠を形成する話型を考えることができるであろう。

けり	（なむ～ける・ぬ）	ぞ～ける・にけり	＋評語

本稿の指摘した類型は、流布本のテキストによるため、原テキストの段階から見られた傾向であるか、本文の改変による面があるかまでは十分に明らかにしがたいが、本作が「ぞ」「なむ」の係り結びを積極的に用い、文章構成に積極的に生かした作品であると位置づけることができる。このような傾向が中世の説話・物語の類でどのような広がりを持っているのか、さらに検証が必要である。

注

① 底本として、高尾稔・長嶋正久編『発心集　本文・自立語索引』（清文堂）を用いた。ただし、踊り字は仮名に改めた。また、段落分けに関して三木紀人『新潮日本古典集成　方丈記・発心集』を参考にした。

② Bの類は、今昔物語集では（一）520例中87例（16・7％）、宇治拾遺物語では（一）78話中14話（17・9％）に過ぎない。発心集では（一）29話中19話（65・5％）で枠構造が明確に現れている。

③ 発心集では「と」を評語に先行する終局部に用いている。この点、評語の後ろに「と」を付して話全体を括る構造の今昔物語集や宇治拾遺物語とは異なっている。発心集では、評語が説話本体から分離され、随想・評論・法語として独立化していることを示している。

④ 大野晋（一九九三）の第4章を参照。

⑤ 小松英雄（二〇〇二）は、「係助詞ゾが、ヒトマズ、ココデ切ルヨ、という予告であるのに対して、係助詞ナムの機能は、ココデ大キクキルヨ、という予告である。したがって、そのあとは、話題が転換するか、短い補足がそれに続くか、さもなければ、そこでディスコースが途切れている。」とする。本稿の観察は、これと逆の結果である。

参考文献

大野晋（一九九三）『係り結びの研究』（岩波書店）

北原保雄（一九八二）「係り結びはなぜ消滅したか」（『国文学』第二七巻一六号）

小松英雄（二〇〇二）『日本語の歴史　青信号はなぜアオなのか』（笠間書院）

阪倉篤義（一九五六）「竹取物語における文体の問題」（『国語国文』第二五巻第一一号

鈴木泰（一九九九）『改訂版　古代日本語動詞のテンス・アスペクト――源氏物語の分析――』（ひつじ書房）

西田隆政（一九九九）「源氏物語における助動詞『ぬ』の文末用法――場面起こしと場面閉じをめぐって――」（『文学史研究』40）

拙稿（二〇一一）「今昔物語集の『けり』のテクスト機能（続）――終結機能を中心に――」（『国語国文』第八十巻第十号）

拙稿（二〇一二）「宇治拾遺物語の『けり』のテクスト機能――今昔物語集・古事談との比較――」（『同志社国文学』第76号）

拙稿（二〇一三）「古本説話集の『けり』のテクスト機能――『にけり』『係り結び』の終結機能――」（『同志社国文学』第78号）